

審査概要

平成二十七年度の文部科学大臣賞の選考は、平成二十六年四月一日から二十七年三月三十一日までの間に刊行された連歌・俳諧・俳句に関する著作百七十一点の中から候補たり得る著作九点を撰び、選考委員七名による綿密な査読を経て選考委員会における慎重審議の結果、深沢眞二著『旅する俳諧師 芭蕉叢考二』（平成二十七年一月、清文堂刊）を最優秀著作として推薦することに決定した。

本著は、長年和漢聯句研究に携わりその成果を『近世初期刊行連歌寄合書三種集成』『和漢』の世界 和漢聯句の基礎的研究』などに発表したあと、それらの連歌・聯句研究から得られた知見を活かして芭蕉作品の読解に踏み込んで来た著者が、『風雅と笑い 芭蕉叢考』に続いてまとめた芭蕉の発句と連句についての注釈的研究書である。「芭蕉の俳諧」を「古典文学に対する批評行為として読む」（序にかえて）という立場からまとめられた本著は四百七十六頁に及び、発句篇・連句篇の二部構成となっている。

その内容の一部を紹介する。前半の発句篇冒頭

に据えられた「枯野の夢夏艸の夢」は、「病雁の夜寒に落て旅寝哉」の句の「雁」を芭蕉の魂の飛翔として読む必要があるとしたあと、遺吟の「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」を共通の発想に拠る句として取り上げて、多くの用例から「廻る」は「メグル」ではなく「マワル」と読むべきことを傍証し、「かけ廻る」のは夢から抜け出した「魂」なのだ」と結論付けている。そして「夏草や兵どもが夢の跡」については、夢を栄枯盛衰の意味に取る従来の説は現代的な語感に引きずられたものであつて、これは芭蕉が自らを夢幻能のワキ僧に見立て、夢のうちに往古の武者共に会い覚めてただ夏草の中にいることに気付いたことを詠んだもの」と論を展開する。次章の「数ならぬ身」の思い」では、芭蕉が亡き寿貞に呼びかけたという説が主流を占める「数ならぬ身とな思ひそ玉祭り」の句を取り上げて、「玉祭り」という語は当時の歳時記また作例ではこの世に残された者の行為や感慨を詠むのが普通で、寿貞への呼びかけと解釈するのは無理があり、これは寿貞の父と目される理兵衛へのそれと見るべきこと、さらに「数ならぬ身」という和歌以来の表現が謡曲を通じて芭蕉に摂取さ

れていることを論証する。そして、寿貞呼びかけ説は、彼女が芭蕉の妾であったとする伝承と絡んでおり、それもまた見直しが必要になって来ると説く。

『おくのほそ道』のそれに象徴されるように芭蕉作品の注釈・評釈の類は極めて多く、新しい知見を披歴しようとすればそれら全てに目を通すという気の遠くなるような作業が必要となるが、著者はそれを厭わない。また、ともすれば諸説をなぞるだけで終始するという傾向が無いわけではないが、著者はそこに留まらず、芭蕉を取り巻く古典的知識また常識がどのようなものであったかを押さえつつ、愚直なまでに芭蕉作品に向き合い、表現の深みに至ろうとしている。それは、芭蕉の俳諧作品を「芭蕉の感情をストレートに表しているとのみ解する」（序にかえて）ことを是としない姿勢の裏返しでもある。以下四篇の論考「獺の祭見て来よ」「萩の旅路」「菊の香」幻想」「芭蕉発句叢考」にもこの姿勢は貫かれている。

後半の連句篇にはほそ道旅中の五歌仙の注釈とそれをベースにした論考「旅する俳諧師―出羽七歌仙から見えること―」を収め、芭蕉の指導意識

を探ろうとしている。綿密な注釈を基にした立論で、芭蕉連句研究の一つの方向を示し得ている。

以上のように、研究史を綿密に踏まえつつ新しい芭蕉表現論を展開し得ている点を高く評価し、本書を今年度の文部科学大臣賞に最もふさわしい著作として推薦する。

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 永井一彰